

金子芳洋（昭和大学歯学部）編

食べる機能の障害

その考え方とリハビリテーション

北村由紀子（横浜市立大学病院リハビリテーション科）

この本は第1章摂食機能を理解するための基礎知識，第2章正常摂食機能の発達，第3章心身障害児における摂食機能の異常，第4章摂食機能訓練，第5章まとめ―摂食障害児のリハビリテーションを成功させるために，の5章より成っている。

第1章では，解剖学的な基礎事項を簡明に記してある。第2章では，正常の摂食機能について，正常児の月齢に沿った説明がなされ，体幹・四肢の運動発達でも原始反射が消失し，立ち直り反応や平衡反応が出現してきて，運動発達が成熟していくのと同じく，摂食機能も原始的な探索反射・口唇反射・吸啜反射・咬反射などが消失して，随意的な捕食の機能が発達し，離乳期については，前期・中期・後期とそれぞれの発達段階を経て，規則性をもって成熟嚥下が獲得されることが述べられている。歩行が確立する頃に，摂食機能もほぼ成人と同じものが確立さ

れることは，きわめて興味深い。第3章では，異常な摂食機能について詳しく述べてある。「咬まずに丸のみする」「舌突出しながら食べる」「スプーンを咬んで離さない」などのよくみられる異常パターンについて，なぜそうなるのか，どう解釈したらよいかを，異常発達のおこるメカニズムを通して説明している。第4章は，実際の摂食障害に対する訓練方法を実例を示しながら，姿勢保持の重要性，捕食機能の獲得が第一のこと，機能にあわせて食形態を変えなければならないこと，根気強く続けなければならないことなどを述べている。第5章では，訓練への取り組み方の心構えを記している。

全体を通して，この本の根底には，食事とは，本来どういうことかという哲学が明確に流れており，繰り返す，繰り返す，その考え方が述べられ，障害児・者に対しての食事の時の接し方について丁寧に説いているといえると思

う。

小児の療育に携っている時に，子どもの全面発達を願うのは誰しも同じであろうが，現実には，摂食面にかかわる専門スタッフは不足しており，とかく四肢・体幹の運動発達を重視しがちである。摂食機能・呼吸機能など生命維持に必要な機能に対して，もっとかわりが必要なることを痛感している者にとって，この本は必読の書である。

0歳から3歳までに訓練を開始した方がよいが，しかしそれ以上の年齢ならやってもダメということではないと書いてあるのを読むと，食事のことでこれでよいのかと思っている人がいれば，この本を読んでその時から訓練にとりかかられると思う。ただし適切な指導を受けられるのが望ましいので，身近にある医療機関・療育センターなどで，相談に応じられる専門家がたくさん育って欲しいと思う。

小児の療育にかかわるすべての人に，また障害児・者の家族の方にも読んでいただきたい本である。著者らの研究・実践に敬意を表します。

（B5，頁160，¥3,200，医歯薬出版刊）